飛行船戦記

アース777

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

飛行船の軍事利用がとても盛んになった世界の空想記。毎週日曜更新予定　やる気があればもっと早いかも

本作品は、Ｐｉｘｉｖでも連載しています！

ｈｔｔｐｓ：／／ｗｗｗ．ｐｉｘｉｖ．ｎｅｔ／ｎｏｖｅｌ／ｓｅｒｉｅｓ／１５４４７４２

目　次

設定？これは絶対読んで!! ―― 1
飛行船戦記＃1 ―― 3
飛行船戦記＃2　移乗攻撃 ―― 6

設定?これは絶対読んで!!

戦争の理由

１９ＸＸ年・・・御万国民共和国とエピーア帝国の不可侵条約締結から１６年目の夏の日

この二国は長年対立関係にあった。古来西方の民主主義に感化されたキピリア王国は民衆のクーデターによる王政打破により共和制になり、対立はさらに険悪なものに

来たる１９ＸＸＸ年、エピーア帝国皇帝ピー・ナッツ２世は御万国共和国に対し宣戦を布告した。

飛行船が発達した理由

ヘリウムや水素以上に非常に浮遊力の高いガス（アーシットガス）が発見され、飛行船に装甲を付けれるまでに発達した。　しかもこの世界には内燃機関やガソリンが存在しないため、飛行船が発達したのは当然である。

なら飛行船はどうやって進んでいるのか

ヘリの要領で傾斜させ進んでいる。

追記するかもしれない

ここからは文字埋め

飛行船戦記＃1

飛鳥「失礼します！」
俺は五十嵐飛鳥。今から空軍の面接を受けるところだ。
面接官「座ってくれ」
面接官「君に聞くことはたった1つだけだ、やる気はあるかな？」
飛鳥「はい！やる気は十分です！」
面接官「よしわかった、君は採用だ」
まじか！昔からの夢だった飛行船空軍に入れる！

それから俺は、巡航飛行船「ビーネ」に配属されることになった。これからは飛鳥三等兵だ。
そして、敵のハイヴ共和国に侵攻をすることになった。今日はその侵攻の日：
索敵兵「敵艦隊発見!!」
艦長「総員攻撃準備！急げ！」
俺の配置は：４０ｍｍ２連装機関砲だ！
ズドドドン！（うおっ！反動が！）スドドドン！スドドドン！　バゴォォォン
まずは一隻：：
――――それから全隻沈めて：――――
搭乗員1「そこの新入り、やるじゃねえかお前！」
搭乗員2「そんなこと言って、お前は【風切り】の一人じゃねえか」
飛鳥「【風切り】って：プロの中のプロって言われてるあの風切りですか!?」
搭乗員1「【風切り】、か：【風切り】なんて良いことは何もねぇッ!!」ギュッ
搭乗員1「何が：何が【風切り】だッ！【風切り】じゃねえッ！何が「エース」だよッ！」ガン！
何だ：？彼には何かあったのか：？

搭乗員２「おい、ちょっと落ち着け、熱くなりすぎだ」
搭乗員１「あぁ、すまねぇ新入り、わざといってるんじゃねぇんだよな・・・すまん、今日はもう寝るわ・・」
搭乗員３「よう、あいつの地雷、踏んじまったのか？」
搭乗員２「搭乗員３か、ああ、踏んじまったよ・・あいつ・・・・いや、殆どのエースには【風切り】とかの、いわゆる【エース】を意味することを掘り下げることはタブーなんだ、次から気を付けろよ？いつもは優しい奴だから、宜しく頼むぜ？」
飛鳥「えと、あーっと・・・こちらこそすみません、不謹慎かも知れないんですが、あの人のお話が聞きたいです・・」
搭乗員２「はは、あいつの話が気になったか？いいよ、話してあげよう。でも、本人には秘密だぞ？」
飛鳥「はい、ありがとうございます・・」
あれは遠い昔・・あいつが２７歳くらいのころ・・だっけ？
あいつは飛行船の搭乗員と、結婚してた。いわゆる職場結婚ってやつかな。
でも、ここは軍だ。
あいつの嫁さんは、銃弾を喰らって死んじまったんだよ。しかも、あいつが見てないところで、だ。
その嫁さんの遺言は、「どうか悔やまないで」だった。でも、あいつは未だに悔やんでるんだ。
俺がもっと鋭く見てれば、俺がもっと早く敵を沈めれば・・・・ってな。
え？どうしてそこまで分かるか、って？あいつとは大分長い付き合いだからな。
まぁ、その地雷をあんたは踏んじまった。まぁ、お前さんは悪くねえよ。エースには誰だって憧れを持つものだしな。
搭乗員３「あれからもう４年か、早いな」
搭乗員２「いや、”まだ４年”だぜ、あいつは死ぬまでこれを忘れねえよ。」
搭乗員３「そうだな、あいつの傷は深い」

翌朝・・・・

搭乗員1「新入り・・じゃなくて、えーっと・・・」

飛鳥「飛鳥、五十嵐飛鳥です」

搭乗員1「飛鳥か、昨日はすまんなかった」

飛鳥「いえ、昨日は私も至らないところがありました、申し訳ございません」

搭乗員1「いや、昨日は俺が悪かった。そういうことにしておいてくれ」

飛鳥「はい、搭乗員1さんがそういうなら」

搭乗員2「いやー、よかった。丸く終わったみたいだね」

搭乗員3「ああ、そうだな」

搭乗員1「お、そろそろ基地じゃないか?」

搭乗員2「いやー、今回も長かったねえ」

搭乗員1「飛鳥は疲れただろうから帰ったらもう寝な」

飛鳥「はい、今日は帰ったらすぐ寝ます・・」

帰投後・・・

飛鳥「はー、疲れた・・・シャワーも浴びたから今日は寝よう・・・・」

zzz・・・zzz・・・

続く

飛行船戦記＃２　移乗攻撃

飛鳥「そんな・・ 裏切るんですか!?」
搭乗員１「裏切る?元から味方はしてねえよ」
搭乗員２「ハッ、見事に裏切られたな」
飛鳥「そんな・・・ なんで・・ !なんでだよ・・!!!」

飛鳥「なんで俺はそんな戦略ゲームに弱いんだ・・ !」
搭乗員１「目先のことばかり考えすぎなんだよ・・ w」
搭乗員２「ちょっちこういうゲームには向いてないかもな」
偵察兵「敵襲!!」
艦長「総員、移乗攻撃準備!!」
えっと・・ !?こういう時はなんで移乗攻撃なんだ・・ !?
えーっとえーっと・・ そうだ!ここで沈めると下の住宅街にも被害が出るからだ・・
艦内無線「敵艦と接舷!!戦闘用意!!」
ガキン!ガン!
艦内では激しいつばぜり合いが起きている。
ザシュッ!
あっ・・ ぁぁ・・・ 人の・・ 血・・・・
飛鳥「ああ、うわあああああああああああ」ペタン
シュ・・ カキン!
搭乗員４「お前、死にたいのか?」
搭乗員４「戦場で棒立ちするんじゃねえ、まあ死にたいなら話は別だがな」
なんだこいつ、嫌な奴だな・・
―戦闘後―
飛鳥「あの人って何なんでしょうか・・・」

搭乗員２「あいつに絡まれたのかぁ…」
搭乗員２「話すと長くなる壮絶な過去があいつにはある、あんなやつでも悪いやつじゃないとでも覚えときゃいいよ」
――――＝Ｓｉｄｅ　搭乗員４＝――――
夜風が涼しい。
あいつを見てると、昔の頃を思い出す。
そう、あれは７年前の夏…
／／／／／／／／／／／／／／
搭乗員４『機関に異常はないな…』
搭乗員５『点検はもう終わったかい？』
搭乗員６『終わったんならババ抜きしようぜ』
搭乗員４『ちょうど終わった所です、はい、やりましょう！』
偵察兵『敵襲!!』
艦長『各員、戦闘準備!!』
新入りだった俺は、あいつのように血に怯えていた。
ザシュッ！
あっ…ぁぁ…人の…血…
搭乗員４『う、うわあああああああ！』
ザシュ
搭乗員４『あ…え…？』
斬られる音がした。目を開けると、目の前で搭乗員５さんが俺を庇って斬られていた。
搭乗員４『何で……俺を…庇って…』
搭乗員５『俺はもう……長く…ない……』ハァ，ハァ
搭乗員５『だから、未来があるお前は……生きろ…』バタッ
搭乗員４『うぅ…ああああああああああああ!!』
あの時の俺は怒り狂った。
俺はいつの間にか【バーサーカー１】の異名が付いていた。何がエースだ!!（ギュッ）
／／／／／／／／／／／／／／

あの時俺は学んだ。人に思い入れると、良いことはない。結局死ぬ。
あの時俺は学んだ。強くなければいけない。俺が誰かを守らなければ。

搭乗員１「よう、何してるんだ？」
搭乗員４「ちょっと昔の思い出を振りかえってました」
搭乗員１「・・・・ お前も色々あるだろう、【エース】だし」
搭乗員４「【エース】ですか・・・・ エースじゃないです、俺は。」ハハッ
搭乗員１「まぁ、そうだな、俺もそうだ。」ククッ
搭乗員１「でもよ、辛いことがあったら、誰かを頼れ。」ピタッ
搭乗員４「誰かを頼るのは・・・ 怖いです。だって、人が死んだら悲しいじゃないですか。仲が良い人なら尚更。」
搭乗員１「過去を乗り越えろ、乗り越えないと一生強くならねえ。」
搭乗員４「何を・・・ 人のことなんて分からない癖に！」
搭乗員１「分からねえよ、そりゃ。」
搭乗員１「分からないから、知ろうとする。人間ってそんなもんだ。」
そんな事を言って、彼は去っていった。
彼となら・・・ いや、どうせ死ぬんだ・・・・ ！
仲良くなっちゃ、仲良くなっちゃ・・・・・ ？

――――＝ＳｉｄｅＢａｃｋ　飛鳥＝――――

飛鳥「俺たちが戦ってる相手って、人なんですよね。」
搭乗員２「当たり前だわな、今回の敵襲で再認識しただろ、戦争ってこういうもんだ」
飛鳥「そんな軽く言ってますけど、苦しくないんですか？」
搭乗員２「冗談じゃねえ、苦しいよ！俺だって苦しい！でも、が綺麗事なんて言うもんじゃねえ!!お前がいってるのは綺麗事だ!!」
・・・・・・・・・・・・ そうか、この人にもこの人なりの【覚悟】があるんだよな・・・・
飛鳥「すいません、軽率な発言を・・・」

搭乗員２「いや、俺こそ済まなかった。悪い」
搭乗員２「もうこんな時間だ、就寝準備をしよう」
飛鳥「了解しました、ではまた明日」ケイレイ
搭乗員２「ああ、じゃあまた明日」テヲフリ
続く